少年少女のための

現代日本文学全集

5

正岡子規集
高濱虛子集

責任編集
久松潛一
伊藤整
福田清人

少年少女のための現代日本文学全集 5

NDC 918.6

少年少女のための
現代日本文学全集 5

夏目漱石集

定価 二五〇円

昭和三十年六月二十七日初版発行
昭和三十一年十月二十三日再版発行

発行者 小嶺嘉太郎

発行所 東京丸ビル 東西文明社

営業所 千代田区神田神保町二ノ二一

印刷 株式会社 上野印刷所
製本 石毛製本所

この本を読む人に

すぐれた文学者は、この世や人間の真実や、美をするどくみつめて、その作品にはっきりとえがいてくれております。私たちは、これを読むことによって、私たちの心をゆたかに、美しくすることができます。

この本には、そうしたすぐれた作家たちの代表的な作品のなかから、さらに少年少女のみなさんが、読むのにふさわしいもの、せひ読んでもらいたいものを、えらんでのせてあります。そして学校で教わらないむずかしい漢字は、かなに改めたり、その意味をしるしたり、またかなづかいも、現代かなづかいになおして、みなさんにしたしみやすいようにしてあります。

その作品も作家のいろいろな面を示すようにしてありますが、あまりに長すぎて、この本にのせきれない作品や、もっとおとなになってから読んだほうがいい部分をふくむものは、その一部をとってのせてあるものもあります。その部分のとりかたもくふうして、その作品のあらましを知られるようにつとめました。

しかし、もちろん原作をこのように改めたといっても、原作の意図およびそ

の味わいなどは、できるかぎり、そこなうことなく伝えることができるよう苦心しました。だから実際は、このままを原作と考えても、さしつかえがないと思っております。

最後に、解説として、その作家の一生や、その作品の説明がつけられております。一つの作品をよく味わうには、それがどのような作家によって書かれたか、その作家の一生、ひととなりを知ることは、きわめてたいせつであります。それで初めに、解説のほうを読んでから作品のほうを読むことも、作品をよく理解することができる方法でしょう。

この解説も、それを書いた人々が、たいへん興味ふかく、親切にしるしてくれておりますので、きっと、作品を読むように、みなさんの心をひきつけてくれるでありましょう。

編集者　久松潜一
　　伊藤整
　　福田清人

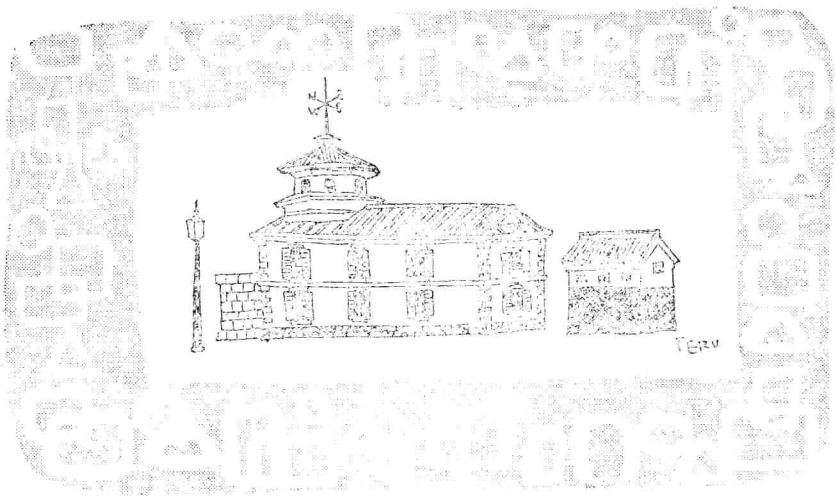
＊本文中、唐（むかしの中国の名）のように、かっこの中に小活字で入れてあるのは、編集部でつけた注です。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

夏目漱石集もくじ

坊ちゃん……七
草枕（抄）……二四
文鳥……一四〇
夢十夜……一五二
永日小品（抄）……一七五
硝子戸の中（抄）……一九七
解説　福田清人……二二

そうてい　青山龍水
カット　山本耀也



夏目漱石集

坊ちゃん

一

親ゆずりの無鉄砲で子供のときから損ばかりしている。小学校にいる時分学校の二階から飛びおりて一週間ほど腰をぬかしたことがある。なぜそんなむやみをしたと聞く人があるかもしれぬ。べつだん深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生のひとりがじょうだんに、いくらいばっても、そこから飛びおりることはできまい。弱虫やーい。とはやしたからである。小使に負ぶさって帰って来たとき、おやじが大きな目をして二階くらいから飛びおりて腰をぬかすやつがあるかと言ったから、この次はぬかさずに飛んで見せますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフをもらってきれいな刃を目にかざして、友だちに見せていたら、ひとりが光ることは光るが切れそうもないと言った。切れぬことがあるか、何でも切ってみせるとうけ合った。そんならきみの指を切ってみろと注文したから、なんだ指くらいこのとおりだと右の手の親指の甲をはすに切りこんだ。さいわいナイフが小さいのと、親指の骨がかたかったので、いまだに親指は手に付いている。しかしきずあとは死ぬまで消えぬ。

庭を東へ二十歩に行きつくすと、南上がりにいささかばかりの菜園があって、まん中にくりの木が一本立っている。これは命より大事なくりだ。実のじゅくする時分は起きぬけに背戸を出て落ちたやつを拾ってきて、学校で食う。菜園の西側が山城屋という質屋の庭続きで、こ

の質屋に勘太郎という十三四のせがれがいた。勘太郎はむろん弱虫である。弱虫のくせに四つ目垣を乗りこえて、くりをぬすみにくる。ある日の夕方折り戸のかげにかくれて、とうとう勘太郎をつらまえてやった。そのとき勘太郎はにげ道を失って、いっしょうけんめいに飛びかかってきた。向こうは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢の開いた頭を、こっちの胸へ当ててぐいぐいおしたひょうしに、勘太郎の頭がすべって、おれのあわせのそでの中にはいった。じゃまになって手が使えぬから、むやみに手をふったら、そでの中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐらなびいた。しまいに苦しがってそでの中から、おれの二の腕へ食いついた。いたかったから勘太郎をかきねへおしつけておいて、足がらをかけて向こうへたおしてやった。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分くずして、自分の領分へまっさかさまに落ちて、ぐうと言った。勘太郎が落ちるときに、おれのあわせのかたそでがもげて、急に手が自由になった。その晩母が山城屋にわびに行ったついでにあわせのかたそでも取り返してきた。

このほかいたずらはだいぶんやった。だいくの兼公とさかな屋の角をつれて、茂作のにんじん畑をあらしたことがある。にんじんの芽が出そろわぬところへわらが一面にしいてあったから、その上で三人が半日すもうをとりつづけにとったら、にんじんがみんなふみつぶされてしまった。古川の持っているたんぼの井戸をうめてしりを持ちこまれたこともある。太いもうそうの節をぬいて、深くうめた中から水がわき出て、そこいらのいねに水がかかるしかけであった。その時分はどんなしかけか知らぬから、石やぼうちぎれをぎゅうぎゅう井戸の中へさしこんで、水が出なくなったのを見とどけて、うちへ帰って飯を食っていたら、古川がまっかになってどなりこんで来た。たしか罰金を出してすんだようである。

おやじはちっともおれをかわいがってくれなかった。母は兄ばかりひいきにしていた。この兄はやに色が白くって、しばいのまねをして女形になるのがすきだった。おれを見るたびにこいつはどうせろくなものにはならないと、おやじが言った。らんぼうでらんぼうで行く先が案じられると母が言った。なるほどろくなものにはなら

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ない。ごらんのとおりの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役に行かないで生きているばかりである。

母が病気で死ぬ二、三日前台所で宙返りをしてへっついのかどであばら骨をうっておいにいたかった。母がたいそうおこって、おまえのようなものの顔は見たくないと言うから、親類へとまりに行っていた。するととうとう死んだという知らせが来た。そう早く死ぬとは思わなかった。そんな大病なら、もう少しおとなしくすればよかったと思って帰って来た。そうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれのために、おっかさんが早く死んだんだと言った。くやしかったから、兄の横っつらをはってたいへんしかられた。

母が死んでからは、おやじと兄と三人でくらしていた。おやじはなんにもせぬ男で、人の顔さえ見ればきさまはだめだだめだと口ぐせのように言っていた。何がだめなんだか今にわからない。みょうなおやじがあったもんだ。兄は実業家になるとか言ってしきりに英語を勉強していた。元来女のような性分で、ずるいから、なかがよくなかった。十日に一ぺんくらいのわりでけんかをしていた。あるときしょうぎをさしたらひきょうな待ち駒をして、人がこまるとうれしそうにひやかした。あんまり腹がたったから、手にあった飛車をみけんへたたきつけてやった。みけんがわれて少々血が出た。兄がおやじに言いつけた。おやじがおれをかんどうすると言いだした。

そのときはもうしかたがないと観念して先方の言うとおりかんどうされるつもりでいたら、十年来めし使っている清という下女が、なきながらおやじにあやまって、ようやくおやじのいかりがとけた。それにもかかわらずあまりおやじをこわいとは思わなかった。かえってこの清という下女にきのどくであった。この下女はもと由緒のあるものだったそうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公まですると言ったのだと聞いている。だからばあさんである。このばあさんがどういうんねんか、おれを非常にかわいがってくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前にあいそをつかした——おやじも年じゅうもてあましている——町内ではらんぼう者の悪太郎とつまはじきをする——このおれをむやみに珍重してくれ

た。おれはとうてい人にすかれるたちでないとあきらめていたから、他人から木のはしのように取りあつかわれるのはなんとも思わない。かえってこの清のようにちやほやしてくれるのを不審に考えた。清はときどき台所で人のいないときに「あなたはまっすぐでよいご気性だ」とほめることがときどきあった。しかしおれには清の言う意味がわからなかった。よい気性なら清以外のものも、もう少しよくしてくれるだろうと思った。清がこんなことを言うたびにおれはおせじはきらいだと答えるのが常であった。するとばあさんはそれだからよいご気性ですと言っては、うれしそうにおれの顔をながめている。自分の力でおれを製造してほこってるように見える。少々気味がわるかった。

母が死んでから清はいよいよおれをかわいがった。ときどきは子供心になぜあんなにかわいがるのかと不審に思った。つまらない、よせばいいのにと思った。きのどくだと思った。それでも清はかわいがる。おりおりは自分のこづかいできんつばやこうばい焼きを買ってくれる。寒い夜などはひそかにそば粉を仕入れておいて、いつのまにか寝ているまくらもとへそば湯を持って来てくれる。ときにはなべ焼きうどんさえ買ってくれた。ただ食い物ばかりではない。くつたびももらった。えんぴつももらった。帳面ももらった。これはずっとあとのことであるが金を三円ばかり貸してくれたことさえある。なにも貸せと言ったわけではない。向こうでへやへ持って来ておこづかいがなくておこまりでしょう。お使いなさいと言ってくれたんだ。おれはむろんいらないと言ったが、ぜひ使えと言うから、借りておいた。実はたいへんうれしかった。その三円をがま口へ入れて、ふところへ入れたなり便所へ行ったら、すぼりと後架の中へ落してしまった。しかたがないから、のそのそ出て来て実はこれこれだと清に話したところが、清は、さっそく竹のぼうをさがしてきて取ってあげますと言った。しばらくすると井戸ばたでざあざあ音がするから、出てみたら竹の先へがま口のひもを引きかけたのを水であらっていた。それから口をあけて一円札をあらためたら茶色になってもようが消えかかっていた。清は火ばちでかわかして、これでいいでしょうと出した。ちょっとかいでみてくさいやと

言ったら、それじゃお出しなさい、取りかえてきてあげますからと、どこでどうごまかしたか札の代わりに銀貨を三円持って来た。この三円は何に使ったかわすれてしまった。いまに返すよと言ったきり、返さない。今となっては十倍にして返してやりたくても返せない。

清が物をくれるときには必ずおやじも兄もいないときにかぎる。おれは何がきらいだと言って人にかくれて自分だけ得をするほどきらいなことはない。兄とはむろんなかがよくないけれども、兄にかくして清からかしや色えんぴつをもらいたくはない。なぜ、おれひとりにくれて、にいさんにはやらないのかと清に聞くことがある。すると清はすましたものでおあにい様はおとう様が買っておあげなさるからかまいませんと言う。これは不公平である。おやじはがんこだけれども、そんなえこひいきはせぬ男だ。しかし清の目から見るとそう見えるのだろう。まったく愛におぼれていたにちがいない。もとは身分のあるものでも教育のないばあさんだからしかたがない。単にこればかりではない。ひいき目はおそろしいものだ。清はおれをもって将来立身出世してりっぱなものになると思いこんでいた。そのくせ勉強をする兄は色ばかり白くって、とても役にはたたないとひとりできめてしまった。こんなばあさんに会ってはかなわない。自分のすきなものは必ずえらい人物になって、きらいなひとはきっと落ちぶれるものと信じている。おれはそのときからべつだん何になるというりょうけんもなかった。しかし清がなるなると言うものだから、やっぱり何かになれるんだろうと思っていた。今から考えるとばかばかしい。あるときなどは清にどんなものになるだろうと聞いてみたことがある。ところが清にもべつだんの考えもなかったようだ。ただ手車へ乗って、りっぱなげんかんのある家をこしらえるに相違ないと言った。

それから清はおれがうちでも持って独立したら、いっしょになる気でいた。どうか置いてくださいと何べんもくり返してたのんだ。おれもなんだかうちが持てるような気がして、うん置いてやると返事だけはしておいた。ところがこの女はなかなか想像の強い女で、あなたはどこがおすき、麹町ですか麻布ですか、お庭へぶらんこをおこしらえあそばせ、西洋間は一つでたくさんですなど

とかってな計画をひとりでならべていた。そのときは家なんかほしくもなんともなかった。西洋館も日本建てもまったく不用であったから、そんなものはほしくないと、いつでも清に答えた。すると、あなたは欲が少なくって、心がきれいだと言ってまたほめた。清はなんと言ってもほめてくれる。

母が死んでから五六年の間はこの状態でくらしていた。おやじにはしかられる。兄とはけんかをする。清にはかしをもらう、ときどきほめられる。別に望みもない、これでたくさんだと思っていた。ほかの子供もいちがいにこんなものだろうと思っていた。ただ清が何かにつけて、あなたはおかわいそうだ、ふしあわせだとむやみに言うものだから、それじゃかわいそうでふしあわせなんだろうと思った。そのほかに苦になることは少しもなかった。ただおやじがこづかいをくれないにはへいこうした。

母が死んでから六年めの正月におやじも卒中でなくなった。その年の四月におれはある私立の中学校を卒業する。六月に兄は商業学校を卒業した。兄はなんとか会社の九州の支店に口があって行かなければならん。おれは東京でまだ学問をしなければならない。兄は家を売って財産をかたづけて任地へ出立すると言いだした。おれはどうでもするがよかろうと返事をした。どうせ兄のやっかいになる気はない。世話をしてくれるにしたところで、けんかをするから、向こうでもなんとか言いだすにきまっている。なまじい保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならない。牛乳配達をしても食ってられるとかくごをした。兄はそれから道具屋をよんできて先祖代々のがらくたを二束三文に売った。家やしきはある人の周旋である金満家にゆずった。このほうはだいぶん金になったようだが、くわしいことはいっこう知らぬ。おれは一ヵ月以前から、しばらく前途の方向のつくまで神田の小川町へ下宿していた。清は十何年いたうちが人手にわたるのをおおいに残念がったが、自分のものでないから、しょうがなかった。あなたがもう少し年をとっていらっしゃれば、ここがご相続ができますものをとしきりにくどいていた。もう少し年をとって相続ができるものなら、今でも相続ができるはずだ。ばあさんは何も知らないから年さえとれば兄の家がもらえると信じている。

兄とおれはかように別れたが、こまったのは清の行く先である。兄はむろん連れて行ける身分でなし、清も兄のしりにくっついて九州くんだりまで出かける気は毛頭なし、といってこのときのおれは四畳半の安下宿にこもって、それすらもいざとなればただちに引きはらわねばならぬ始末だ。どうすることもできん。清に聞いてみた。どこかへ奉公でもする気かねと言ったらあなたがおうちを持って、おくさまをおもらいになるまでは、しかたがないからおいのやっかいになりましょうとようやく決心した返事をした。このおいは裁判所の書記でまず今日にはさしつかえなくくらしていたから、いままでも清に来るなら来いと二三度勧めたのだが、清はたとい下女奉公はしても年来住みなれた家のほうがいいと言って応じなかった。しかし今の場合知らぬやしきへ奉公がえをしていらぬ気がねをしなおすより、おいのやっかいになるほうがましだと思ったのだろう。それにしても早くうちを持ての、妻をもらえの、来て世話をするのと言う。親身のおいよりも他人のおれのほうがすきなのだろう。

九州へたつ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出してこれを資本にして商売をするなり、学資にして勉強をするなり、どうでも随意に使うがいい、そのかわりあとはかまわないと言った。兄にしては感心なやり方だ。なんの六百円くらいもらわんでもこまりはせんと思ったが、例に似ぬたんぱくな処置が気にいったから、礼を言ってもらっておいた。兄はそれから五十円出して、これをついでに清にわたしてくれと言ったから、異議なく引き受けた。二日たって新橋の停車場で別れたぎり兄にはその後一ぺんも会わない。

おれは六百円の使用法について寝ながら考えた。商売をしたってめんどうくさくってうまくできるものじゃなし、ことに六百円の金で商売らしい商売がやれるわけでもなかろう。よしやれるとしても、今のようじゃ人の前へ出て教育を受けたといばれないからつまり損になるばかりだ。資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。六百円を三にわって一年に二百円ずつ使えば三年間は勉強ができる。三年間いっしょうけんめいにやれば何かできる。それからどこの学校へはいろうと考えたが、学問は生来どれもこれもすきでない。こと

に語学とか文学とかいうものはまっぴらごめんだ。新体詩などときては二十行あるうちで一行もわからない。どうせきらいなものなら何をやっても同じことだと思ったが、さいわい物理学校の前を通りかかったら、生徒募集の広告が出ていたから、なにもえんだと思って規則書をもらってすぐ入学の手続きをしてしまった。今考えるとこれも親ゆずりの無鉄砲から起った失策だ。

三年間まあ人なみに勉強はしたがべつだんたちのいいほうでもないから、席順はいつでも下からかんじょうするほうが便利であった。しかし不思議なもので、三年たったらとうとう卒業してしまった。自分でもおかしいと思ったが、苦情を言うわけもないからおとなしく卒業しておいた。

卒業してから八日めに校長がよびに来たから、何か用だろうと思って、出かけて行ったら、四国辺のある中学校で数学の教師がいる。月給は四十円だが、行ってはどうだという相談である。おれは三年間学問はしたが実を言うと教師になる気も、いなかへ行く考えも何もなかった。もっとも教師以外に何をしようというあてもなかったから、この相談を受けたとき、行きましょうと即席に返事をした。これも親ゆずりの無鉄砲がたたったのである。

引き受けた以上は赴任せねばならぬ。この三年間は四畳半に蟄居してこごとはただの一度も聞いたことがない。けんかもせずにすんだ。おれの生涯のうちでは比較的のんきな時節であった。しかしこうなると四畳半もひきはらわなければならん。生まれてから東京以外にふみ出したのは、同級生といっしょに鎌倉へ遠足したときばかりである。こんどは鎌倉どころではない。たいへんな遠くへ行かねばならぬ。地図で見ると海浜ではりの先ほど小さく見える。どうせろくな所ではあるまい。どんな町で、どんな人が住んでるかわからん。わからんでもこまらない。心配にはならぬ。ただ行くばかりである。もっとも少々めんどうくさい。

家をたたんでからも清の所へはおりおり行った。清のおいというのは存外結構な人である。おれが行くたびに、おりさえすれば、なにくれともてなしてくれた。清はおれを前へ置いて、いろいろおれのじまんをおいに聞かせ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com